



「イエス・キリストの名によって 立ち上がり、歩きなさい」

使徒言行録 第2章6節

青山教会牧師 増田 将平

教会中高生・青年大会2014実行委員長

来る8月19~21日、教団としては44年ぶりに中高生と青年を対象にした全国規模の大会を御殿場の東山荘で開催します。主題は「イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」です。生まれながら足の不自由な人にペトロが告げた言葉です。この言葉を聞くと彼は立ち上がり、神を賛美し始めます。立たせたのはペトロではありません。ペトロは右手を取って立ち上がるのを手伝っただけです。彼を立たせたのは「イエス・キリストの名」、復活された主イエス・キリストです。立ち上がることができなかった一人の人が、イエス・キリストとの出会いによって力づけられ、立ち上がることができました。

かつてのペトロもそうでした。ある時、主イエスが十字架の死と復活を予告すると、ペトロは「そんなことがあってはなりません」と言います。すると主は彼に言いました。「あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」。ペトロは主を三度否みます。弟子として自分の足で歩いてきた自信が粉々に碎かれるのです。もう二度と立ち上がることはできないと思っていました。

それなのに、なぜペトロは立ち上がるることができたのでしょうか。復活した主イエスがペトロのところに



Mikotoba

近づき、ペトロと出会う
てくださったからです。
主が十字架についてく
ださったのはこの自分
のためであり、主は自
分を赦し、愛してお
られること

が分かったのです。主がペトロの手を取って立ち上がらせてくださいました。ペトロが立ち上がったとき、彼は独りぼっちではありませんでした。周りには仲間たちがいました。

若者たちもこの大会に来て、独りぼっちではないことを知ることができます。自分を見失い、将来に不安を感じ、前に進み出すことができない若者たちがいます。しかし、主イエスが出会ってくださいます。同世代の若者たちと共に御言葉に聞き、賛美する3日間を過ごすことで、北海道から沖縄まで全国の諸教会に仲間がいることを喜びのうちに発見するでしょう。

ペトロが立ち上がることができるようになるために、主イエスが祈っていました。「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」。ペトロは主イエスの祈りと十字架と復活によって今の自分があることを知っていたからこそ、今後は隣人を力づけるためにイエス・キリストに仕えるのです。

私どもにも金銀はありませんが、東山荘に集う若者たちに、彼らのために祈っておられ、出会ってくださるイエス・キリストを指し示すお手伝いができればと心から願っています。

沖縄伝道推進プロジェクト

読谷教会牧師 具志堅 篤

先だって「日本伝道会」(有志の会)の締めくくりに「沖縄伝道キャラバン」(嵐の中の伝道)が実施された。その精神は継承され、教団に「伝道推進室」が設置された。そして、沖縄伝道支援が開始されたことは感謝なことである。

しかし、今、沖縄教区は教団と距離を置いている。それは10年を超えた。その間、あたかも鎖国状態にある。教団の情報がかかなり歪んだ形で教区内諸教会・伝道所に伝わるという霊的不健康な状態に置かれている。ウチナー=善、ヤマト=悪とのヘイトスピーチも次第にエスカレートしてきている。平和(シャローム)にも距離が置かれてしまったかのようで実に残念なことだ。

確かに沖縄が抱える現状は厳しい。即ちこの国において異常な程に差別的扱いを受けている。それを中々共有出来ないもどかしさを覚える。そのような地で伝道しようとするとならで誰に向けて何を語れば良いのか分からなくなるという状態に陥ってしまうことも少なくない。おかしい現象だと思うかも知れない。「チャースガ(どうするの?)」、マーカイガ(どこへいくの?)」彷徨う沖縄の教会の姿は今に始まったものではない。それほどに、厳しい現実の中に

置かれ、その地で宣教することの難しさを物語っている。

教区は、教団と距離を置く。しかし、教区内にそのスタンスに立たない教会もある。だからと言って、それらの教会は教区に距離を置かない。「御言葉を宣べ伝えなさい。折りが良くても悪くても励みなさい」(IIテモテ4:2)。

我々は、いかなる状況に置かれようとも、伝道したい。ただ、それだけだ。教団信仰告白に立ち、沖縄に「キリストの平和」を発信しなければならない。「キリストは我らの平和」と声高らかに、キリストの十字架と復活の福音を宣教したいのです。

現在、無牧の教会を支えつつ、互いが支えられるようにと我々は、同じ信仰に立つ教師を派遣して頂いた(派遣先:真和志教会、与那原教会、高原教会、美里教会、上地教会)。先の御言葉には、続きがある。「とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです」。伝道推進室からの教師派遣は、沖縄の教会が愛されている証しである。是非、継続していただきたい。

なぜ、そのようなことをするのかと問う者もあろう。答えはそこにある「主がお入り用なのです」。

神様に感謝！ 恵みと力が届けられ

美里教会牧師 大坪 園子

美里教会には、お二人の先生が伝道の応援に駆け付けてくださいました。2013年10月13日には、上原智加子牧師(須磨月見山教会)がイザヤ2章1~5節、マタイ5章9節から「平和を造りだす」と題してお説教下さいました。2014年1月26日には、藤盛勇紀牧師(教団総務幹事)がイザヤ4章1~7節、ローマ8章14~30節から「祈り絶える時にも」と題してお説教をして下さいました。

いずれの日も、私は、他教会での説教奉仕だったためにお説教をお伺いすることができませんでしたが、美里教会のお一人ひとり、派遣して下さいました先生のお説教によって「主からの新しい力を頂いた」との喜びの報告をして下さいました。

上原先生は、美里教会の2代前の故高崎毅志牧師の牧会中に、美里教会にて献身をなさった方です。教会の皆様は、上原先生の執りついで下さる御言葉の一言一言に、生ける神様の素晴らしさを覚えられたと伺いました。また加えて

感謝なことは、上原先生が美里教会にお説教にいらして下さったことにより、10年以上教会から離れていた姉妹が戻っていらったことです。

また、藤盛先生が美里教会でお説教して下さいしたことも、特別に感謝なことでした。お説教により、美里教会の祈りへの熱心さがより一層増し、伝道への思いがますます熱くされました。先生方のお説教により、イエス様こそが救い主であられること、場所や時代が違っても信仰は一つであること、洗礼は一つであることを教会皆で実感しました。

救い主イエス様は、その十字架と復活の贖いにより、悔い改める者に罪の赦しと永遠の命を下され、私達の教会を愛して常に伴い、私達を主の最善の道へと導いて下さっていることを感謝します。

先生方を説教者としてお送り下さり、美里教会に大きな恵みと力をお届け下さったことを、神様と伝道推進室に携わる先生方に感謝します。

福音は同じ、 福音は一つ

高原教会牧師 大坪 直史

今年度、沖縄教区にある私たち教団の教会は、伝道推進室のお働きを通して、主の豊かな祝福・恵みにあずかることができました。

2013年11月24日、高原教会は高承和牧師（聖和教会）を説教者としてお迎えし、御言葉（聖書：マタイ25章14～30節、説教題：『タラントンのたとえ話』）を通して福音の恵みにあずかせていただきました。この機会を通して、私たちは東京にある教会におきましても沖縄にある教会におきましても、どこにおきましても福音は同じ、福音は一つであるということを、覚えさせられました。

また、2014年1月26日、私は生活困窮者や野外生活者の他、刑務所出所者などを主な伝道の対象としておられる他教派の教会から説教者として招かれましたが、伝道推進室が説教者をお遣わしく下さいましたので、私は他教派の教会の説教奉仕に当たることが許されました。沖縄と言えば、基地問題や平和問題ばかりが注目されがちですが、こ

の社会には、人生そのものに諸問題を抱える人々や福音を必要とする人々が多数存在しています。ですから、私たちが教団・教派の枠組みを超えて、沖縄伝道のために他教派の教会の礼拝において奉仕させていただきましたことは、大変意義深いことでありました。

伝道推進室の伝道支援により、沖縄教区にある私たち教団の教会は、地域の垣根を超えて立てられた教団の諸教会や他教派の諸教会が、同じ福音に生かされる教会、一つの福音に生きる教会であることを、改めて恵み深く自覚させていただきました。私たちは、このお働きのためにご奉仕くださいました諸先生方とご協力くださいました諸教会に、何より私たちの教会の頭なる主イエス・キリストに、心から感謝申し上げます。

今後とも、伝道推進室のお働きが、主の祝福・恵みの内に地域の垣根を超えてますます力強く押し進められますよう、伝道に燃える思いをもって祈りたいと思います。

2度にわたる 伝道支援を感謝して

上地教会牧師 富山 信

さる2013年10月に岸憲秀牧師（千葉本町教会）が、伝道推進室から派遣されてこられました。礼拝において、「5,000人の給食」のテキストから、小さき者（子供の奴隷であったかもしれない）が差し出したわずかな物を、主が祝して用いてくださったことを聴きました。

また、午後の講演会は「青年伝道」をテーマに、日本基督教団の青年伝道の歴史について教えてくださいました。証しとして、先生が友人の何気ない食前の祈りに触れたことで信仰を持つに至ったこともお話くださいました。

伝道を方法として知ればよいと言うのではなく、神様のお働きに参与するものであることを一同深く悟られました。

そして、2014年2月には北紀吉牧師（愛宕町教会）がおいでくださいました。礼拝にて「ぶどう園の労働者」テキストからお語り下さいました。躓き、困難こそが神様に私達を近づけること。色々なものに囚われやすい私達だが、神様は囚われない自由な救い主として関わって下さる事をメッセージしてくださいました。1日1デナリという確かな保証の中に招かれた者とは、永遠の御国への保証が与えられている者なのだと豊かに語ってくださいました。

午後の修養会は、「主のみ言葉の慰め」というテーマでお語りくださいました。神の言葉を礼拝において、居住まいを正して聞くことの大切さを知らされました。さらに、主から罪の赦しの宣言を託されているのは、教会だけであ

ること、自ら奮い立って伝道しなければならないのではなく、恵みに生かされている者として宣べ伝えて行くことをお語り下さいました。

講演の結論で、震災にあわれた方々を真の意味で慰めるのは、主イエスの十字架であると語られました。「わが神、わが神、なぜ、わたしをお見捨てになるのですか」と叫ばれた主が、死せる者、失われし者にと結び合ってくださいということ、ゆえに、「慰めがある」「復活への希望がある」と。真に、福音を語ることが許されているということが、なんと幸いなことであるかを知らされた時でありました。

2回の伝道推進室からの応援は、教会を力づけ、ビジョンを確かなものとして下さいました。

特に、子どもを持つ若い母親たちと高齢の方々への伝道が、今の日本で伝道の対象として十分な可能性を秘めているという示唆は、当教会の伝道の方向ときれいに重なり、意を強くして伝道に臨めるものとなりました。



宮城・山形

3. 8 (土) 石巻、仙台、山形へ出発
 . 9 (日) 主日礼拝、伝道講演会、献身の証、讃美の時
 . 10 (月) 仙台にて、祈りの時、讃美の時
 . 11 (火) 東日本大震災国際会議へ

多くの方々の祈りの実りを感謝と併せてご報告させていただきます。

伝道推進室が祈りのうちに企画をしてくださった宮城・山形伝道キャラバンが、3月8日(土)～10日(月)の日程で行われました。石巻山城町教会、泉高森教会、名取教会、山形本町教会、山形六日町教会がこのキャラバンを受け入れてくださいました。

8日は、集合場所からそれぞれ車に乗り合わせ、石巻、仙台、山形のチームに別れ、それぞれの場所で宿泊をいたしました。9日はそれぞれの教会で礼拝が守られ、午後にはそれぞれの教会のご要望に応じて、伝道講演会や神学生による献身の証、讃美の時などを持ちました。その夜にはキャラバンの参加者全員が仙台市内に集まり祈りの時、讃美の時を持ちました。10日の午前中には被災地に赴き祈りの時を持ち、午後は11日から行われた東日本大震災国際会議の準備の奉仕をさせていただきました。

準備の段階から東北教区と企画を進めることができたなら更に豊かなものとなったことと思いますが、連絡不足等でご迷惑をおかけしてしまったことは、私の反省点です。また、今回受け入れてくださった教会とも、準備の段階からもう少し詳しく打ち合わせをすべきでしたし、今回受け入れてくださった教会以外にキャラバンを迎えたい思いを持っておられた教会があったことを後に知らされ、申し訳なく思います。

ただ、教会や参加した神学生の感想文を拝見し、神様は多くの恵みの実りをお与えくださったことを知らされ、主の憐れみ深さを味わうことがゆるされました。このことを通して主がお与えくださった善き実りが、参加者の中で、またそれぞれの教会の中で、熟して更によりものとなり、日本基督教団全体の喜びとなるように祈りたいと思います。

東北教区センター主事 山元 克之



3月9日、主日礼拝に訪問した教会、説教者、キャラバンメンバー

(敬称略)

山形本町教会	説教 石橋秀雄 (越谷教会)	瀧山喜与実 (神学生)	山田 美穂 (神学生)
山形六日町教会	説教 山畑 謙 (小金井緑町教会)	石澤麻希子 (神学生)	野川 祈 (青年)
泉高森教会	説教 北 紀吉 (愛宕町教会)	酒井 麻利 (神学生)	
名取教会	説教 清藤 淳 (和歌山教会)	長倉 基 (神学生)	北浦 圭佑 (神学生)
石巻山城町教会	説教 岩田昌路 (粕江教会)	和泉 景太 (神学生)	清水 義尋 (青年)

泉高森教会

宮城県仙台市泉区高森

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

思いを新たに

泉高森教会員 中村 伸夫

先日までの大雪もようやく姿を消したかのような3月9日、教団伝道推進室による伝道キャラバンとして、北紀吉牧師においでいただいた。

午前の礼拝においては「わたしは罪深い者」と題して、ルカ書5章の力強い御言葉の説教をいただき、引

き続き「伝道、大いなる愛—信仰に固く立つ—」と題してミニ伝道講話を拝聴した。救いの確信に固く立つことこそが伝道力の回復であることを踏まえ、高齢者、家族伝道、伝道集会などについて、的を射たお話をうかがうことができた。

泉高森教会は仙台市北部丘陵地に開拓伝道を開始してから25周年を迎える。

去る東日本大震災でのいまだ癒えぬ悲しみや課題は多いが、主の御旨を信じて、御言葉に従い、この地における伝道の業に励みたい。今回のキャラバンを通してその思いを新たにしたい。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

伝道の志を

山形本町教会牧師 石井 佑二



Yamagatahoncho Church

この度、伝道キャラバンをお迎えし、石橋秀雄教団議長、山畑謙牧師、神学生、青年と交わりの時を土曜日に持ち、翌日には礼拝説教、神学生の証、伝道講演会を行えましたことを、心から感謝いたします。

この時期は東日本大震災を特別に憶える時期であり、伝道キャラバンを適切にお迎えできるかどうか、心配をしておりました。しかしそれは杞憂でした。むしろ教会が一体となって共に主を賛美することができました。石橋議長の礼拝説教や神学生の証は、震災の痛みの中にあって、なお私たちを生かす神の恵みを明らかにし、また伝道講演会での石橋議長と山畑牧師のお話は、そのような状況の中で生きる教会の伝道の志を新たに示して下さいました。

またこのような機会が与えられますならば、願わくは、東北教区との連帯を視野に入れて頂ければ幸いです。この度の伝道キャラバンから、伝道の最前線に生きる現場の教会として、大きな励ましを頂きましたことに、心から感謝いたします。



Ishinomakiyamashirocho Church



Yamagatamuikamachi Church



Izumitakamori Church

伝道の喜びを経験する旅

伝道キャラバンに参加して

東京神学大学 4年 酒井 麻利

宮城県の泉高森教会を訪問させていただきました。東京神学大学の関川泰寛教授が開拓伝道なされた教会です。共に学生寮で生活する神学生の母教会でもあります。ですから、一度訪れてみたいと思っていた教会でした。

閑静な住宅地の中にありました。会堂の中は明るく、男女比が半半、どの世代の方もまんべんなくおられ、教会員の構成が社会と変わらない印象でした。女性が多かったり、お年をめした方が多い傾向がありがちな中で、珍しいのではないのでしょうか。

北紀吉牧師に説教して頂き、共に礼拝を守らせていただきました。礼拝後には伝道をテーマに、北先生に講演して頂きました。そのあとで私も、献身するに至ったことを証しさせて頂きました。

新来会者が少ないと聞きましたが、豊かな祈りと賛美の時をご一緒させていただき、信仰に地方も都会もないことを感じました。主の導きにより、共に礼拝を守れましたことを感謝いたします。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

東京神学大学 3年 和泉 景太

今回、岩田昌路牧師と越谷教会の青年の清水義尋兄弟と私の3人で関川祐一郎牧師が牧会する石巻山城町教会を訪問させていただきました。石巻山城町教会は町全体の9割が津波の被害を受けた中、津波から免れ、石巻の支援活動の拠点として復興のために尽力された教会であります。礼拝の出席者数は30名ほどで青年は少ないですが、教会の雰囲気は明るく活気がありました。そして何より礼拝前の静けさには驚かされました。その礼拝を待ち望む姿は、まるで苦難の中にあっても、礼拝とそこで語られる御言葉によって支えられてきたということを証ししているようでした。

礼拝の説教を岩田牧師が執り行い、礼拝後に愛餐会でもてなしを受け、そこで私と清水兄弟が証しをしました。その後、エマオの飯野久美子姉妹に当時や現在の状況などの説明をうけながら町を見渡せる高台、記念碑、石巻ニューゼなどを案内していただきました。

このキャラバンによって初めて被災地を訪れ、共に礼拝を守り、被災地の方と交わりが持てたことを感謝いたします。

自主企画キャラバン報告

秋田・青森

礼拝準備／雪かき作業と 礼拝・祈禱会奉仕



2014年2月11日から24日迄、奥羽教区内の豪雪地域の諸教会（湯沢・秋南・大曲・秋田高陽・秋田桜・秋田飯島・鷹巣・黒石・青森戸山）に10名の神学生が、礼拝準備としての会堂管理（除排雪作業）と祈禱会や礼拝奉仕を担ってくれました。

チームを組んで大勢の働き人が来て、奥羽各地で仕えてくれたことは、雪に阻まれ閉塞感に陥る豪雪地域にとって「目に見える祈り」と映ります。疲労困憊する作業を文句も言わずに行い、祈禱会や礼拝では誠実に御言葉を語ってくれました。

北東北の片隅で、よそ者が遠路はるばるやって来て、当地の人々が辟易する作業に当たっているだけで、近所から教会に関心が寄せられます。一般社会にも増して少子高齢化が進んでいると思える地方教会の内部で、牧師を志す若い献身者たちの言葉は、彼らを召した神さまの働きを身近に感じさせてくれました。そんな形で神学生たちは希望を届けてくれました。

この時この場だからこそこの伝道の働きが支えられたことを感謝しています。

大曲教会牧師 飯田 啓子

日本基督教団「教会中高生・青年大会 2014」ご案内

今夏、教会中高生・青年大会 2014 が行われることになったのは、この上ない喜びである。第15回教団総会（1968年）での機構改正直後、全国教会宣教会議が教団紛争によって粉碎して以来、ようやく教団をあげて青年大会が行われる。2000年第32回教団総会は、「日本基督教団は21世紀に青年伝道に力を注ぐ」決意表明を決議した。あれから15年。ついにこの時が来た。

青年伝道を担ってきた有志団体が協力して、最初に青年大会をしたのが宣教150周年。そして、その協力団体の呼びかけで2017年宗教改革500年には大規模な青年大会を行おうと他団体に呼びかけたのが2011年であった。2017年のプレとして行った大会が2012年であった。この時、教団の伝道方策委員会と教育委員会が後援した。教育委員会主催の台湾ユースとの交流プログラム、ユースミッションの参加者たちも参加し、また、韓国からのユースも加え、国際色豊かな大会となった。

2017年を待てないという機運は、「伝道に燃える教団」を動かした。それが、2014年8月の御殿場へという思いを動かしたのだ。

これは誰かがやろうという思いを超えて、主の導きに他ならない。いざ！御殿場へ。キリストの名の下に、明日の教団の担い手たちよ、結集せよ。

千葉本町教会牧師 岸 憲秀

主 題 「イエス・キリストの名によって

立ち上がり歩きなさい」

日 時 2014年8月19日（火）～21日（木）

場 所 財団日本YMCA同盟 国際青少年センター 東山荘
（静岡県御殿場市東山1052）

講 師 青 年 ▶ 芳賀 力氏（東京神学大学）

高校生 ▶ 深井智朗氏（金城学院大学）

中学生 ▶ 塩谷直也氏（青山学院大学）

問合せ 日本基督教団伝道推進室



プロテスタント
日本伝道 155 年

最新の教勢分析から読み取れること

II

第 38 教団総会期／常議員・目白教会員 鈴木功男

教団 2030 年問題と 年齢構成から何を読み取るか

【教団 2030 年問題】

世間では、2030 年問題ということが盛んに言われたことがあった。しかし、教団ではそれ以前から指摘されていたことであった。世間での問題と、教団での事柄とは内容が全く異なる。

《グラフ 1》はその核心を示している。これは、戦後、教団統計の出そろった時から、10 年毎の単位を一世代として、現在は第 7 世代の半ばにある（前号のグラフを参照されると便利）。1948 年から 2018 年までの大人の受洗数は 277,647 人。ただし 2014 年～18 年は暫定数として、年間 1,500 人受洗としてある。

一目して分かることは、第 1 世代、第 2 世代の後、第 3 世代以後に大きな変化があったこと。言い換えれば、第 1 世代、第 2 世代に続く世代が、同じようには与えられなかった。この戦後受洗第 1、第 2 世代の信徒が限りなくゼロになる年が 2030 年で、現住陪餐会員数の減少はそこに向かって限りなく進む。それが更に教団・教区の機構、財政など、避けて通れない厳しい状況へと繋がっていく。これが 2030 年問題。

【教団の高齢化】

一般的に言われる高齢率は、65 歳以上の数値で次のように分類されている。高齢化社会＝高齢化率 7%～14%、高齢社会＝14%～21%、超高齢社会＝21%。

《グラフ 2》は教団各教区の年齢構成を示している。右端の全国平均を数値で表すと以下の通り。30 歳未満 4.7%、30 歳代 6.5%、40 歳代 11.2%、50 歳代 14.4%、60 歳代 23.6%、70 歳以上 39.6%。

これを一般の高齢率に合わせるために 60 歳代の数値の 2 分の 1 を 70 歳以上の数字に加算すると 51.6%ということになる。日本社会の

数字とは成り立ちが全く異なる。つまり数字的に見ても教団の歴史から見ても、「世間の高齢化の波が教会にもやってきた」という判断とは別物であることが分かる。

しかし、「高齢化問題」と言われるとき、高齢そのものが問題であるかのように受け止められるのは、いささか短絡的で、教会員の高齢者が多いことは、ご恩寵そのものであることを証言しているのである。60 歳以上に相当する全信徒の 63%が教会を支え教団を支えることが出来る現実、なによりも礼拝に招かれている喜びは、お恵み以外の何ものでもない。

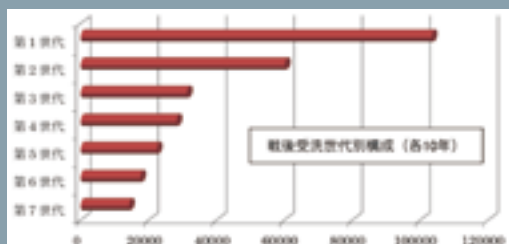
ただ、牧会ということでは、高齢に伴う様々な対応に迫られることは確かで、それが高齢問題だというより教会の業として豊かに祝される事柄といえよう。

【高齢問題の裏返しは青年問題】

《グラフ 1》は、戦後受洗第 1 第 2 世代に続く世代が与えられなかった。もし、それに続く世代が同じように与えられていれば、グラフが変わっていたであろうし、「高齢問題」という言葉も生れてはこなかったであろう。この状況を「高齢問題」というならば、それは「青年問題」であると言わなければならない。わたしたちは、青年を教会に招くことができなかった。若い人達に御言葉を伝えることができなかった。グラフはそのことを叫んでいる。

グラフは因果関係を明瞭に示す。どうしてそうなったかを導き出すことは出きる。それよりも、今日のわたしたちは、御言葉を携えて外に出て行く道程を示されたいと願わずにはいられない。

《グラフ 1》



《グラフ 2》



伝道トラクトをご利用下さい



今般、伝道推進室として**伝道用トラクト**を、**姜尚中氏**と**近藤勝彦牧師**にお願いして作成しました。どちらも、ご自身の体験を基にして尊いキリストへの導きの言葉がつづられています。素敵でデザインとあいまって、人々の心を引きつけることと思いますので、是非ご利用下さい。

尚、**1,000 枚以上ご注文いただければ、教会名等必要事項を入れて印刷（1枚につき2円増）**いたしますので、お申しつけ下さい。トラクトは**1枚 10 円**です。お二人を説教者・講師としてお招きの折には、大いに役立ちますので、お用いいただければ幸いです。

皆様の御教会の伝道の働きに、神の豊かな祝福を祈ります。

問い合わせ・お申し込みは ▶ 伝道推進室 (TEL03-3202-0544)

仕上がりサイズ
190mm×105mm
(二つ折り)

献金のお願い

「あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」(マタイによる福音書6章21節)。「富」と言えるほどではないかも知れませんが、献金を通して私たちの心もそこに向けませんか。教勢低下が続く中で、イエス・キリストの伝道命令に従い、日本の各地で福音伝道に苦闘している教会を助ける働きが始まっています。この働きに「献金」を通してお心を向けてください。「伝道推進室」に皆様のお心が向けられることを祈り願っております。

教会伝道応援、開始します！

伝道推進室は、教会伝道応援として、「**伝道礼拝・伝道集会等への講師派遣**」を開始いたします。伝道応援を希望される教会には、各教区の協力委員長とご相談を頂き、所定の手続きに従ってお申し込みを頂きます。**伝道推進室が、講師謝礼、交通費、宿泊費、広報費等を負担**させていただきます。詳細は別紙または教団 HP (申込書をダウンロードできます) をご覧ください。

郵便振替口座
00150-4-338628
日本基督教団
伝道推進室



《伝道推進室基本方針》

日本基督教団は、聖なる公同の教会に連なる福音主義合同教会である。本教団は、簡易信条と公会主義の伝統を継承しつつ、十字架と復活の主のご委託に応じて、日本伝道の幻に仕える。伝道推進室は、伝道委員会のもとに設置された機関であり、『日本基督教団信仰告白』と『日本基督教団教憲教規』に基づく信仰の一致をもって、さらには将来の『伝道局』構想を視野に入れつつ、教団全体における伝道の実践と研究に取り組み、教団内諸教会、諸団体における伝道の推進に仕えるために活動する。

● 発行者／石橋秀雄 ● 発行日／2014年4月20日

伝道推進室報 No.3

● 発行所／日本基督教団 伝道推進室

《日本基督教団事務局内》

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-31 〈郵便振替 00150-4-338628〉

TEL 03-3202-0541 FAX 03-3207-3918 URL <http://uccj.org>

編集後記

レントからイースターへの歩みに福音の恵みが満ち溢れますよう、お祈りいたします。伝道推進室報 No.3 をとおして、沖縄の諸教会への講師派遣、宮城・山形キャラバン、秋田・青森キャラバンの交わりに、主が生きて働かれた証しを分かちあい、来たる中高生・青年大会に向けて、いよいよ恵みに満たされる歩みを、皆様と共に祈りたいと願っております。

(広報実務委員会)